

「二」 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。 解答番号は「二」の 1 から 13 までとする。

読んでいない本について語ることはまぎれもない創造の活動なのである。目立たないかもしれないが、これより社会的認知度の高い活動と同じくらい立派な活動なのだ。人々はこれまで、伝統的な芸術実践に注意を向けるあまり、それより評価の低い実践をなおざりにしてきた。^①こうした実践は当然ながらいわば秘密裡になされるからである。

しかし、読んでいない本について語ることが正真シヨウメイの^a創造活動であり、そこでは他の諸芸術の場合と同じレベルの対応が要求されるということは明らかである。そのことを納得するためには、^②そこで動員されるさまざまな能力、つまり作品に潜在する諸々の可能性に耳を傾けたり、作品が置かれる新たなコンテクストを分析したり、他人とその反応に注意を払ったり、さらには人の心をとらえる物語を語ったりする能力のすべてに思いを馳せれば十分だろう。

この⁸「⁸」は、読んでいない本について語る言説だけに関係しているのではない。より高いレベルでは、創造そのものが、その対象が何であろうと、書物から一定の距離をとることを要求する。というのも、ワイルドが示しているように、読書と創造とのあいだには一種の二律ハイハン^bが見られるのであって、あらゆる読者には、他人の本に没頭するあまり、自身の個人的宇宙から遠ざかるという危険があるのだ。読んでいない本についてのコメントが一種の創造であるとしたら、^③逆に創造も、書物にあまり拘泥しないということを前提としているのである。

みずから個人的作品の創作者になることは、したがって、読んでいない本についていかに語るかを学ぶことの論理的な、また望ましいキケツ^cとしてあるといえる。この創造は、自己の征服と教養の重圧からの解放に向けて踏み出されたさらなる一步である。教養というものはしばしば、それを制御するすべを学んでいない者にとって、存在することを、したがってまた作品に生命を与えることを妨げるものである。

読んでいない本について語る方法を学ぶということが、創造の諸条件との出会いの最初の形であるとするなら、^④教育に従事するすべての者にはこの実践の意義を説く責任があるということになる。彼ら以上にそれを伝達するのにふさわしい人間は

いないからである。

学生たちは学校で本の読みかたや本について語る方法は教わっているが、読んでいない本について語る方法を教えることは学校のプログラムには奇妙にも欠けている。ある本について語るためにはそれを読んではいけないというコウジュン^dが疑問に付されたことは一度もないようである。したがって、彼らが、試験で自分の「知らない」本について質問されてうろたえ、それに答えるための材料を自分自身のなかに見出すことができないとしても、何の不思議もないのである。

つまり、^⑤教育が書物を脱神聖化するという教育本来の役割を十分果さないで、学生たちは自分、自分の本を書く権利が自分たちにあるとは思わないのである。あまりに多くの学生が、書物に払うべきとされる敬意と、書物は改変してはならないという禁止によって身動きをとれなくされ、本を丸暗記させられたり、本に「何が書いてあるか」を言わされたりすることで、自分をもっての逃避の能力を失い、想像力がもつとも必要とされる場面で想像力に訴えることを自らに禁じている。

本は読書のたびに再創造されるということを学生に教えることは、数多くの困難な状況から首尾よく、また有益なしかたで脱する方法を彼らに教えることである。というのも、自分の知らないことについて巧みに語るすべてを心得ているということは、^⑥書物の世界を超えて活かされうることだからである。言説をその対象から切り離し、自分自身について語るといって、多くの作家たちが例を示してくれた能力を発揮できる者には、^e教養のソウタイが開かれているのである。

わけてももつとも重要なもの、すなわち創造の世界が開かれている。われわれが学生たちにできる贈り物として、創造の、つまり自己創造のさまざまな技術にたいする感受性を養うことほど素晴らしい贈り物があるだろうか。あらゆる教育は、それを受ける者を助け、彼らが作品にたいして十分な距離をとり、みずから作家や芸術家になることができるよう導くべきだろう。私自身も、(中略)、世間の批評家たちに道を逸らされることなく、着実に、また平常心をもって、読んだことのない本について語りつづけてゆきたいと思う。

もしそうすることをやめて、多くの受動的読者に合流するようなことにでもなれば、私は自分自身を裏切ったという思いを禁じえないだろう。それは私の出自にたいする、そして創造へといたる私の読書経験にたいする不実であるからだ。それはま

た、人々が教養というものにたいする恐怖に打ち克ち、そこからあえて身を引き離してものを書きはじめるよう助言するとい
う、私がこんにち自分の使命と心得ていることへの裏切りでもあるだろう。

(ピエール・バイヤール著、大浦康介訳『読んでいない本について堂々と語る方法』による。ただし本文の一部を省略した)

問一 二重傍線部①～⑤の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

1	①	1 一流のメイガラ	2 人気がテイメイする
	3	国際レンメイ	4 ライメイがとどろく
2	②	1 面従フクハイ	2 人々のスウハイを集める
	3	コウハイした世界	4 自動車のハイキガス
3	③	1 ケツコンの約束	2 ダムがケツカイする
	3	これはケツサクだ	4 清廉ケツパクを貫く
4	④	1 組織のジュンカツユ	2 行事のジュンビが進む
	3	ジュウジュンな態度	4 ジュンカン論法に陥る
5	⑤	1 カツダンソウの調査	2 未知とのソウゲウ
	3	出来事のソウカツ	4 セツソウのない態度

問二 傍線部①はどうか、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

- 1 読んでいない本について語るのは、創造的な活動ではあるが、人前で発表されないということ
- 2 読んでいない本について語るとは、芸術実践に比べると評価が低く、誰もやりたがらないこと
- 3 創造的な活動は、伝統的な芸術実践に昇華されてこそ意味があるので、それ以外は隠されてきたこと
- 4 創造的な活動は、それを成立させるために個人の努力や工夫が隠されており、公開されていないこと

問三 傍線部②はどうか、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 作品を精読することで、そこに隠されたメッセージやコンテキストを読み取る力のこと
- 2 作品を読む前に解釈するために必要な、絵画や彫刻、写真等の様々な芸術的能力のこと
- 3 作品を読む前に語る際に必要な、それまでに様々な本を読んで身に着けた推測力のこと
- 4 作品を解釈したり、位置づけたり、批評したり、人の注意をひきつけたりする力のこと

問四 空欄 8 に入る言葉として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 教養人になること
- 2 創作者になること
- 3 冒険家になること
- 4 研究者になること

問五 傍線部③であるのはなぜか、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 すでにある知識を得ることと、新たに何かを生み出すことは、同時に行うのが困難な作業であるから
- 2 本ばかりにこだわらず、広い視野で世の中を見なければ、新しいものを創造することができないから
- 3 他者が書いた本を読み過ぎると、その世界にとらわれて、自分の人生を有意義に生きられないから
- 4 いざ読んでいない本について語ろうとしている時に、本を読むことに拘っているのは本末転倒だから

問六 傍線部④はどういうことか、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 誰かに何かを教わる人間であれば、誰しもがすでにたくさんの本を読んでしまっているが、そうした雑念を思い切って忘れさせることこそ教師の責任であること
- 2 教育者に従う人々は、多種多様な創造的取組に役立つ方法である、読んでいない本を語ることの意義について責任をもって理解せねばならないこと
- 3 誰かに何かを教える人間であれば、創造的な営みに必要な要素を持っている「読んでいない本について語る」ことの重要性を説明する必要があること
- 4 教育を行う人々は、読んだことのない本について語るといって創造的な方法について興味を持ち、それを指導する方法を讀書によって学ばねばならないこと

問七 傍線部⑤はどうか、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

11

- 1 教師は、書物を過度に偏重しない方法を教える役割を担っていたはずなのだが、その本来的な意義が忘れ去られており、学生たちが書籍を出版することができなくなっていること
- 2 教師は、伝統ある教材や教授法を神聖化する部分があり、学生たちに創造的な文章を書くことを教えなければならぬ立場にありながら、時代にあつた執筆法を伝授できていないこと
- 3 元来、教育という営みは聖典を丁寧に写し取ることで書くことを学ばせるものであったが、今はそうした本来の役割からは脱してしまっており、学習者に書き方が伝わらないこと
- 4 本来、教育は書物を固定化され絶対化されたテキストとして扱うのではなく、学習者が自分の考えやアイデアを生み出すことを助けるものであるはずだが、そうはなっていないこと

問八 傍線部⑥はどうか、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

12

- 1 読書や経験から得た知識を出所不明な状態にして、独自の解釈で縦横無尽に論を展開すること
- 2 本に書かれていることや様々な知識を換骨奪胎して活用し、独自の価値を創出して発信すること
- 3 本や新聞に掲載されている論説を切り抜いて保管しておき、それらを元に自己について論じること
- 4 対象の観察や読書による情報より、自分の頭で考えたことこそ価値があり有意義な書き物になること

問九 本文の趣旨と合致するものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1 読書というものは、他者の考えをそのまま受け取り、それを絶対的なものとして受け取ることを促進し、自分の考えを持つことを阻害する行為であるが、本文を読まずに、タイトルから自分で内容を類推することは創造的であり、今後の教育はこうした方法を採用するべきである

2 読んでいない本について語ることは、本を読むことを抑制するためのものではない。むしろ、これを行うことは、実践者が知識や教養をどのように扱うかを考えることの契機となり、自律的に物事を考えたり、文章を書いたりする能動的で創造的な主体の形成につながりうる

3 読書というものは、多くの人が考えている以上に能動的で創造的なものであり、すべてを通読する必要もなければ、読んでいない本について語っても良い。むしろ、そうした実践こそが、教師が支配する教育のあり方に変更をせまり、硬直的な社会を打破することにつながる

4 読んでいない本について語ることは、様々な人から批判を受けることもあるが、著者にとっては創造性を担保するために必要な営みであるので、引き続き、他者のアイデアを受動的に吸収するばかりの読書行為はやめて、自分の考えを文章化することに集中するつもりである

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。 解答番号は 〔二〕の 1 から 8 までとする。

（皇后の女房を務めていた伊勢は藤原仲平と恋愛関係にあったが、仲平は別の女性を妻にしまった）

かく人の婿になりになれば、「いまは訪^とはじ」とおもひて、ありし大和にしばしあらむとおもひて、かくいひやり

ける

伊勢^② みわのやまいかに待ち見む年経^{としふ}ともたづぬる人もあらじとおもへば

枇杷^{びはのおとど}大臣の御かへし

仲平[※] 唐土^{もろこし}の吉野の山にこもるともおもはむ人に我おくれめや

この歌返^{うたのかへし}、男よみて、奈良坂よりおこせける。^{③※}

仲平 A 世をうみの泡とうきたる身にしあればうらむることぞ数なかりける

をんな、かへし

伊勢 B わたつうみと頼めしことのあせぬれば我ぞわが身のうらはうらむる

大和に三月^{みつぎ}ばかりありけるに、竜門[※]といふ寺に詣でたりけり。正月十一日ばかりなりけり。この寺のさまは、雲の中より滝は落つるやうに見ゆ。[※]山の人の家といふは、いたう年経て、岩の上に、苔八重むしたり。みしらぬ^ア心地に、いとかなしう物のみあはれにおぼえて涙は滝におとらず。^①橋のもとにしばしあるに、いと暗うなりぬ。^ウ「雨や降ら

んとすらん」と供なる人といふ。法師ばら「雪ぞ降らん」といふほどに、いみじう大きな雪かきくらし降れば、人々「歌詠まむ」といふに、この詣でたる人

伊勢 裁ち縫はぬ衣着し人もなきものを何やまひめの布さらすらん

と詠みたりければ、さらにこと人詠まずなりにけり。

いまはみちにいでて、越部といふ所にやどりぬ。かの御寺のあはれなりしをおもひいでて

伊勢 見も果てずそらに消えなでかぎりなく厭ふ憂き世に身のかへりくる

と一人ごちて、7もしほるばかりに泣きぬらしけり。

（『伊勢集』による）

※唐土……宋の国のことだがここでは遠い場所のたとえ

※奈良坂……山城国から大和国へ入る奈良山越えの道

※竜門……大和国吉野にあった寺院

※山の人……仙人

※裁ち縫はぬ衣……仙人の着る縫い目のない衣

※やまひめ……山を守りおさめる女神

※越部……大和国吉野の地名

問一 傍線部①の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1

1 今となつては仲平を訪ねることもできない

2 今となつては仲平は訪ねてこないだろう

3 今のところは仲平を訪ねないようにしよう

4 今のところは仲平も訪ねてくるだろう

問二 傍線部②の和歌を送った目的として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

2

1 これまでと同様に、仲平を待たせたり自分が待っていたりできるのかを確認するため

2 都から遠く離れた三輪山まで、仲平がひそかに訪ねてくれるのかを問い合わせるため

3 仲平に他に通う本妻ができて、彼の到来を待っていてもむなしいと嘆いて責めるため

4 本妻ができた後も、これまでと同様に仲平のもとを訪ねたいという心情を訴えるため

問三 傍線部③の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

3

1 大和国まで訪ねていけなかったとしても、せめて伊勢のいる場所に近づいてはいたかったから

2 大和国の伊勢のいる宿を訪ねて自分の気持ちを伝えたことを、国の境で振り返りたかったから

3 本妻のいる山城国では伊勢に訪ねてもらふ訳にはいかないのです、国の境で待つことにしたから

4 山城国と大和国の間は遠く離れているため、伊勢に追いつくことはできないとあきらめたから

問四 AとBの和歌の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

4

- 1 Aは掛詞の技法を用いて相手の心をなだめようし、Bはあえて技法を用いず軽薄な相手を責めている
- 2 Aは序詞を使つて憂いを訴える表現を引き出し、Bは枕詞で生きる虚しさを表す語を引き出している
- 3 A・Bのいずれも係り結びの技法を使っているが、強調されている好悪の感情は対照的である
- 4 A・Bのいずれも縁語の技法を用いて、自分の方が相手をより恨めしく思っていると訴えている

問五 二重傍線部㉗㉘のうち意味の異なるものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

5

- 1 ㉗ みしらぬ ㉘ おとらず
- 2 ㉗ おとらず ㉘ 暗うなりぬ
- 3 ㉗ 暗うなりぬ ㉘ 見も果てず
- 4 ㉗ 見も果てず ㉘ 暗うなりぬ

問六 傍線部④の内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

- 1 高い滝や苔むした岩の風情に伊勢が悲しみを重ねていたところに、夜になって雪まで降ってきた
- 2 仙人や女神の存在を感じさせる荘厳な風景に感心してしまい、伊勢以外は歌を詠めなかった
- 3 滝のように降る雨に濡れるのがあまりにも辛かったので、雪をかいてその中で暮らすことにした
- 4 年を経た寺の美しい風景や建物の姿にみなが感心し、伊勢が周りに促されて代表して歌を詠んだ

問七 空欄 7 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 傘
- 2 頭
- 3 腕
- 4 袖

問八 本文と同じ私家集として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 伊勢物語
- 2 山家集
- 3 古今和歌集
- 4 枕草子

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。 解答番号は〔三〕の 1 から 8 までとする。

ポケットを探って取出した部屋の合鍵が、掌にひやりとした感触を与えるほどの時候になっていた。

暗い部屋に入って電燈を点け、まず表に向った窓を開放^{あけはな}つて空気を換える。それから、隅に吊るした鸚鵡^{おうむ}の籠をのぞいて餌の有無を見てから、衣服も換えずに、ベッドの上に仰向けに、両手の掌を頭の下に組合せて、ひっくりかえる。

そう疲れるはずはないのに、ひどく疲れたような感じである。今日一日、何をしたか？ 何もしはしない。朝遅く起き、朝昼兼帯の食事を階下の食堂で済ませてから、読みたくもない本を無理に辞書と首つぴきで十頁ほど読み、それに倦^うむと、親戚の子供の死んだのにくやみの手紙を出さなければならぬことを思い出して、書こうとしたが、どうしても書けない。結局手紙はよして、表に飛出^{とびだ}し、街へ行って映画館に入り、そうして帰って来ただけのことだ。何という下らない一日！ 明日は？ 明日は金曜と。勤めのある日だ。そう思うと、かえって何か助かったような気になるのが、自分でも忌々しかった。

時勢に適應するには余りにのろまな・人と交際するには余りに臆病な・一介の貧書生。職業からいえば、一週二日出勤の・女学校の博物の講師。授業に余り熱心でもなく、さりとて、特に怠惰という訳でもない。教えることよりも、少女たちに接して、これに「心優しき軽蔑」を感じることに興味をもち、そうして秘かにスピノザに倣[※]って、女学生の性行についての犬儒^{※シニョック}的な定理とその系とを集めた幾何学書を作ろうか、などと考えている。（例えば、定理十八。女学生は公平を最も忌み嫌うものなり。証明。彼女らは常に己に有利なる不公平のみを愛すればなり。の如き。）結局、学校へ出る二日は自分の生活の中で余り重要なものでないと、この男は思い込みがっているのだが、この頃では、それがなかなかそうではなく、時として、学校が、というよりも、少女たちが、自分の生活の中にかなり大きい場所を占めていらっしゃることに気付いて愕然とすることがある。

学校を卒業して二年目、父の死によって全く係累のなくなった三造が、その時残された若干の資産を基に爾後^{じご}の生活の設計を立てた。その設計に従ってその時自分がヌクヌクともぐり込もうとした坑^{あな}の、何と、うじうじと、ふやけた、浅間^{あさま}しくもだ

らしいものだったか。今の三造には腹が立つて腹が立つて堪らないのである。^③

その時、彼は自分に可能な道として二つの生き方を考えた。一つはいわゆる、出世——名声地位を得ることを一生の目的として奮闘する生き方である。もとより、実業家とか政治家とか、そういうものは、三造自身の性質から、また彼の修めた学問の種類からいっても、問題にならない。結局は、学問の世界における名誉の獲得ということなのだが、それにしても、将来の或る目的（それに到達しない中に自分は死んでしまうかも知れない）のために、現在の一日一日の生活を犠牲にする生き方である点に、変りはない。もう一つの方は、名声の獲得とか仕事の成就とかいう事をまるで考えないで、一日一日の生活を、その時その時に充ち足りたものにして行こうという遣り方、但し、その微の生えそうなほど陳腐な欧羅巴^{ヨーロッパ}出来の享受主義に、若干の東洋文人風な拗ねた侘びしさを加味した・極めて（今から考えれば）うじうじといじけた活き方である。

さて、三造は第二の生活を選んだ。今にして思えば、これを選ばせたものは、畢竟^{ひつきよう}彼の身体の弱さであつたろう。喘息と胃弱と蓄膿^{じよく}とに絶えず苦しまされている彼の身体が、自らの生命の短いであろうことを知って、第一の生き方の苦しさを忌避したのである。今に至るまで治りようもない・彼の「A」もまた、この途を選ばせたものの一つに違いない。人の中に出ることをひどく恥^{はづか}ずかしがるくせに、自らを高しとする点では決して人後に落ちない彼の性癖が、Bを他人の前

にも自らの前にも曝し出すかも知れない第一の生き方を自然に拒んだのもある。④とにかく、三造は第二の生き方を選んだ。そして、それから二年後の、今のこの生活はどうだ？ この・乏^{ひそ}しく飾られた独り住居の・秋の夜^{あきよ}のあじきなさ？ 壁に掛けられたあくどい色の複製^{ふくせい}どもも、今はもう見るのも厭だ。レコオド・ボックスにもベエトオベンの晩年のクワルテットだけは揃えてあるのだが、今更かけて見よう気もしない。小笠原の旅から持帰^{もちかえ}った大海亀の甲羅ももはや旅への誘いを囁かない。壁際の書棚には、彼の修めた学課とは大分系統違いのヴォルテルやモンテエニユが空しく薄埃をかぶって並んでいる。鸚鵡や黄牡丹^{いんぎん}いんぎんに餌をやるのさへ億劫だ。ベッドの上にひっくり返って三造はただ茫然としている。身体も心も心棒が抜けてしまったような工合である。日々の生活の無内容^{むりよう}さが彼の中に洞穴をあけてしまったのか。それは先刻記憶から喚起した・あの底無しの不安とは全然違う。腑抜けとなり、不安も苦痛も感じなくなったような麻痺状態である。

はやけた彼の意識の隅に、しかし、明日出勤する学校の少女たちの雰囲気、それだけが彼の仮死的な生活の中で、唯一の生きたものであるかのように、明るく浮上^{うきあが}つて来た。一人一人に見れば、醜くもあり卑しくもあり愚かでもある少女たちが自分の生活の中で触れ得る唯一の生きた存在なのか？ 豊かであるようにと予定したはずの日々が何と乏しく虚しいことか。人間は竟に、執着し・狂い・求める対象がなくては生きて行けないのだろうか。やっぱり、自分も、世間が——喝采し、憎悪し、嫉視[※]し、阿諛^{※あゆ}する世間が、欲しいのだろうか。例えば、と彼は考えない訳に行かない。例えば、先週勤め先の学校で国漢の老教師が近作だという七言絶句を職員室の誰彼に朗読して聞かせていた時、父祖伝来の儒家に育った自分が冗談半分その韻をふんで咄嗟^{とつさ}に酬いて見せた。その巧拙よりも、方面違いの若い博物の教師がそんな事をして見せたものだから、老先生はすっかり驚いて、人の良さそうな大袈裟な身振^{みぶり}で讃め上げてくれたのだが、全く、その時、自分は——尊大なるべき俺の自尊心は——何と卑小な喜びにくすぐられたことだろう！ 実際、その老教師が讃めた言葉の一句一句をさえハッキリ記憶しているほど、喜ばされたのではなかったか。ワイニングルによれば、女は、一生の間に自分に向って言われた讃辞^{ほめことば}をことごとく覚えていゝるものだそうだが、どうやらこれは女ばかりに限らないようだ。そういえば、俺はここ何年何箇月かの間、自分に向って発せられた一つの讃辞をも聞かなかった。自分の飢えていたのは、こんな詰まらないもの、^⑤に對してだったのか。それでは、それほど、つぽけな虚栄心を充たしたがっているお前が、何故、こんな世間とかけ離れた生活を選んだのだ。オデュッセイアと、ルクレティウスと、毛詩鄭箋^{ていせん}と、それさえ消化^{こな}しかねるほどの・文字通りの「スモオル・ラティン・アンド・レス・グリイク」と、それだけで生活は足りると思つていた俺は、何という人間知らずだったことであろう！ 杜樊川^{とはんせん}もセザアル・フランクもスピノザも填めることのできない孔竅^{あな}が、一つの讃辞、一つの阿諛によつてたちまち充たされるという・人間的な余りに人間的な事実、（そして、自分のような生来^{うせつ}の迂拙[※]な書痴にもこの事実が適用されることに）三造は今更のように驚かされるのである。

まだ寝るには早過ぎる。それに、どうせ床に入つたところで、いつものように二・三時間は眠れないに決つてゐる。三造は何ということもなく、身を起して、ベッドの端に腰を下したまま、ぼんやり部屋の中を眺める。二・三日前、机の抽斗^{ひきだし}を搔廻^{かきまわ}

していたら、紙屑にまじって線香花火の袋が出て来た。夏の終に入れ忘れられたもので、まだ中に花火が少し残っていた。それをその時そのまま、また抽斗につっこんで置いたのを、今、彼はひよいと思いついた。彼は立上って抽斗からそれを取出す。花火を出して見ると、まだ、そんなに湿ってはいないらしい。彼は電燈を消して、マッチを擦る。暗闇に、細い・硬い・輝きのない・光の線が奔って、松葉が、紅葉が、咲いて、すぐに、消える。火葉の匂が鼻に沁み、瞬間淀み切っていた彼の心は、季節外れの・この繊細な美しさにいささかの感動を覚えていた。余りにも惨めな・いじけた・侘びしい感動を。

(中島敦『狼疾記』による)

※スピノザ……十七世紀のオランダの哲学者

※犬儒的……蔑み笑うさま。世をすねた

※複製……ここでは絵画の複製品を指している

※嫉視……ねたましく思っていること

※阿諛……気に入られようとして、おもねりへつらうこと

※スモオル・ラティン・アンド・レス・グリイク……十七世紀のイギリスの詩人・劇作家のベン・ジョンソンが、シェイクスピアを

指して「ラテン語はあまりできず、ギリシャ語はなおのこと駄目」つまり無教養者だと評したエピソードからの引用文

※書痴……読書ばかりしていて、世の中のことにうとい人

問一 傍線部①の理由として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1

- 1 女学校への出勤は億劫ではあるが、学校へ出れば女学生や他の教員たちと触れ合うことで孤独が癒されるから
- 2 女学校への出勤義務が週二日の頻度で課せられることによって、日々の生活にほど良い緊張感が生まれるから
- 3 女学校への出勤日は自由な時間が少ない分、時間を有意義に使えなかった後悔や自己嫌悪も感じずに済むから
- 4 女学校への出勤は、無内容な生活をしている自分が社会的責任を果たす喜びを実感できる数少ない機会だから

問二 傍線部②の理由として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

2

- 1 勤務先の女学校には帰属意識を感じているが授業にはやりがいを見出せないから
- 2 女学校講師の給料では貧書生の立場から抜け出せないと不満を覚えているから
- 3 自分には女学校の仕事より重要な内的生活があるという自負を捨てたくないから
- 4 女学生たちと触れ合うことが内心では嫌になっっている事実を認めたくないから

問三 傍線部③の理由として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

3

1 学問を修めた人間であれば本来誰しも学問の世界における名誉獲得のため奮闘すべきなので、その義務から逃げた自分の情けなさに怒りを覚えるから

2 出世や名声への執着を捨て、日々を充ち足りたものにするつもりで選んだはずの今の生活が、当初思い描いていたものとはおおよそかけ離れているから

3 死んだ父親が遺してくれた資産を頼りにして、うじうじとふやけた、だらしない生活をしてやろうと目論んだ過去自分は間違っていたと気付いたから

4 学問の世界における名誉獲得か、日々の生活を充実したものにするかの単純な二者択一だけが人生の選択肢だということ思いこみ自体が失敗だったから

問四 空欄 A と B に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

4

1 A 臆病な自尊心 B 才能の不足

2 A 尊大なる虚栄心 B 将来への不安

3 A 尊大なる虚栄心 B 才能の不足

4 A 臆病な自尊心 B 将来への不安

問五 傍線部④の説明として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

5

1 経済的貧困の中で実現できる文化的生活の質には限界があることが、部屋を飾る文物の乏しさによって明らかになったということ

2 身寄りのない独居生活を長期間続けていると秋の夜には特に強く孤独を感じ、部屋を飾る数々の文物も慰めにならないということ

3 文化的関心と関係なくただ室内に無秩序に並べられた文物が、日々の生活の無内容さを皮肉にも証明してしまっているということ

4 文化や教養への関心や好奇心が希薄になり、かつて好んで収集した文物に対しても以前のような感興を覚えなくなったということ

問六 傍線部⑤の説明として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

1 自分が内心では他者や社会からの承認に飢えているという事実に向かい、世間の価値基準と無関係に内面的な充足みに依拠する生活など、そもそも無謀な企てだったと感じている

2 自分はそもそも内面的な充足を追い求める生活には向いておらず、他者からの称賛を求める生き方にこそ喜びを感じると気づき、自分という人間の特徴を誤解していたと感じている

3 内面的な充足を追い求めるだけでは決して満たされなかった心が、他者からの讃辞でたちまち充たされたことで、自分人間同士の触れ合いの大切さを知らずにと後悔している

4 社会における名誉の獲得を生きる喜びにするのが人間の本性なので、自分も内面的な充足のみを求めるのではなく、学問の世界における名誉のため努力すべきだったと後悔している

問七 傍線部⑥とはどのような感動か。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 卑小な虚栄心から逃れられない己の心を浄化し、日々の生活を充実させる助けにもなるささやかな感動
- 2 一見みすばらしい装いでありながら、実は松葉や紅葉の瑞々しさが見る者の心を力強く揺り動かす感動
- 3 淀んだ心情に置かれた知識人だけが感じとることのできる、繊細な彩りがもたらす純粹芸術の美の感動
- 4 自らの情けない現状に対して止めどなく湧き上がる失望を、一時的であるにせよ薄れさせてくれる感動

問八 本文の内容として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 三造は女学生や他の教員から称賛される目的で女学校勤務を続けているが、そのような自分自身に失望もしている
- 2 三造は内面的な充足を重視する生き方を選んだ自分を愚かだったと感じている一方、今の生活を変える気力もない
- 3 三造は出世や名声獲得のために努力しなかったせいで今の自分の生活が無内容になったことを嘆き、後悔している
- 4 三造は他者や世間からの承認を渴望してしまうのが人間の性だと考えてる一方、自分自身は例外であると思っている

(以下 余 白)